

女子高校生を対象とした リプロダクティブ・ヘルス教育の実践

A report about reproductive health education for female high school students

岸田 泰子 藤井智恵美
Yasuko Kishida Chiemi Fujii

キーワード： 高校生，リプロダクティブ・ヘルス，性教育

key words: female high school students, reproductive health, sexual education

要 旨

女子高校生5名を対象として、「女性と健康」という講座の教育を実施する機会を得た。そこで実際に現在の女子高校生のリプロダクティブ・ヘルス（性と生殖に関する健康）に対する意識がどのようなものであるか，またこのような健康教育の内容をどのように受け止めているのかを知り，若い世代のリプロダクティブ・ヘルスの保持増進を目指すための支援のあり方を検討した。実践を振り返り，自らのライフコースを描くということを意識すること，体験型の学習を取り入れることが，次世代育成支援のための教育に有効であると考えられた。

I はじめに

われわれは母性看護学を教育する立場から，常日頃，女性の健康を意識することが多く，また女性の健康増進のための支援に対する高い関心を抱いている。2014年7月，女子高校生を対象として，「女性と健康」という講座の教育を実施する機会を得た。そこで実際に現在の女子高校生のリプロダクティブ・ヘルス（性と生殖に関する健康）に対する意識がどのようなものであるか，またこのような健康教育の内容をどのように受け止めているのかを知り，若い世代のリプロダクティブ・ヘルスの保持増進を目指すための支援のあり方を検討したいと考え，この機会を活用することとした。高校生に対する性と健康に関する教育では，性感染症や避妊，性行動にいたる対人的なスキルを養う内容のことが多い¹⁾⁻³⁾。しかしながら今回の試みは，

高校生らが自らの性を受け止め，将来的なライフコースを描き，次世代を育成する存在であるかもしれないという意識を持たせ，リプロダクティブ・ヘルスを保持増進させることを意図して行った。

また講座における授業展開にディスカッションを用いることにより，一方的な知識伝達にとどまらないこと，自分なりの考えを持ち，解釈を行うこと，他者と意見交換を行うことでその違いに気づき新しい視点を持つことができるなど^{4), 5)}をねらい，授業の一部に取り入れることとした。

今回，実施した教育の内容や方法を振り返り，今後の教育活動のための示唆を得ることを目的として本稿をまとめ，より効果的なアプローチを模索したいと考えている。

受付日：2014年10月10日

受理日：2015年1月13日

共立女子大学 看護学部 母性看護学

Ⅱ 講座の概要

1. 開講期間および授業時間

2014年7月22日～26日の5日間であった。1日につき、50分の授業を2コマ連続で実施した。

2. 対 象

A女子高校1～2年生のうち講座名「女性と健康」の履修を希望した生徒5名であった。内訳は1年生1名、2年生4名であった。

3. 具体的内容

授業概要および内容は表のとおりであり、各日において1コマ目を講義、2コマ目をディスカッションに当てた。ディスカッションは受講生5名で1グループを形成し、進行は授業を担当した著者らが行った。進行役は、グループメンバー全員が話せるように配慮しながら行い、話された内容の要約を筆記した。そして筆記した内容を繰り返し読み返して講座を振り返った。

4. 倫理的配慮

本講座の受講者に対しては、協力に際し、ヘルシンキ宣言、文部科学省・厚生労働省による疫学研究に関する倫理指針に基づき、個人の人権の擁護、個人への不利益ならびに危険性と看護学への応用、途中撤回の権利について文書にて事前に説

明を行った。協力者が未成年であることから、説明および同意については保護者に対しても行った。同意が得られる場合には、生徒と保護者の双方から署名をいただいた。同意が得られない参加者がいる場合、その参加者の発言内容については分析に加えないことを付記した。協力しない場合も不利益を受けることはない、すなわち、講座は変わらず受講できることを書面にて説明して参加の権利を保障した。同意書は、高校を通じて生徒に配布していただき、回収は、講座初日に同意書を封筒に入れ厳封した上で、生徒から直接、著者へ提出していただいた。

また高校側に対しては、事前に教頭および講座担当教諭に相談し、内諾を得た。その後、共立女子大学研究倫理審査委員会の承認を得た後、講座を実施した（承認番号 KWU-IRBA#14059）。

Ⅲ 講座展開の実際

以下、日を追ってディスカッションの要約筆記をもとにした高校生の様子と進行役の所感を織り交ぜ、実際に振り返る。なお、同意書は講座参加者5名全員から回収されたため、すべてのディスカッションの内容を分析した。

1. 第1日目

テーマ：思春期の心とからだ

講座初日であり、生徒らに緊張した様子が見ら

表 講座の概要

| 講座概要 | 女性が健康に生活するために必要な知識を学ぶ。具体的には、女性のからだのしくみについて理解するとともに、女性におこりやすい健康障害について学習する。また女性特有の性と生殖に関する健康について、他者とのディスカッションを通して理解を深め、将来の自分のライフコースを描く。 | | | | |
|-------------|---|--|---------------------------|-----------------------------------|-----------------------------|
| 日数 | 第1日目 | 第2日目 | 第3日目 | 第4日目 | 第5日目 |
| テーマ | 思春期の心とからだ | 月経とのつきあい方 | 生命の誕生 | リプロダクティブ・ヘルス／ライツ | 女性のライフコース |
| 講義内容 | 男女のからだの構造 二次性徴 心理・社会的特徴 性分化疾患 | 月経のしくみ 正常と異常 PMS（月経前症候群） 対処行動 | 妊娠と出産のメカニズム | 性感染症 家族計画・避妊 不妊とART（高度生殖医療） | 妊娠期、産褥期疑似体験 女性のライフコースモデル |
| ディスカッションの内容 | 自己紹介 初経時の気持ち 初経教育 性アイデンティティ | 自分の月経のアセスメント 自分に合った対処行動は？ | 自分の出生について （家族からの情報による） | ARTと倫理、女性の権利について考える | 自分のライフコースを描く 講座の感想 |

れた。雰囲気のを和らげるよう、講義の段階から、生徒らに問いかけながら、反応を見つつ進行することを心がけた。講義のあとは、車座となって自己紹介をはじめた。この講座を申し込んだ理由についてたずねたところ、2年生4名は友人同士であり、相談して申し込んだようであり、また1年生も顔見知りの関係であった。全員が運動部に所属しており、講座の後は部活動に参加するとのこととで夏休み時期を多忙に過ごしていた。女性特有の健康という講座概要にも興味をもっていたが、それよりも、本講座の担当者が大学の看護学部教員であるということで、進学を意識した大学の講義と看護学部に対する興味からの参加動機が強いことがわかった。5名中3名は看護学部を志望していた。

その後のディスカッションでは、女性としてのアイデンティティについてたずねた。「女子同士でいるととても気持ちが良い、共学は楽しそうって思うこともあるけど。でも今が楽しい。オープンな感じがいい」、「(講義を聞いて、女性のからだの特色を知って)女性に生まれてよかったと考えることにつながった」、「男だったらイケメンに生まれなかったら悲惨。女のほうが楽しいことが多い。女でよかった」、「お母さんになったら、もっと女性になってよかったと思うかも」など、女性であることに対して肯定的な反応が見られた。

ディスカッションの内容では、初経のときの気持ち、初経教育はどのように受けたかについてたずねた。初経時、「マジかあ」、「複雑だった」、「なんとも思わなかった」など様々な気持ちを抱いていた。全員が小学5年生のときの臨海学校の前に女子だけ集合させられ、学校での初経教育を受け、その場でナプキンを配布されたという。その前に母親から初経の話は聞いていたという者もいた。

また初日の時点で将来のライフコースについてたずねると、5名中3名は27～28歳くらいで結婚し、3人の子どもを持ちたいと考えていた。「若いお母さんがいい。保育園とかできれいなお母さんだといいなって思うから」などと答えた。残り2名は結婚願望がないと答えた。理由は「1人の時間がほしいから。家庭にしばられたくない。好きなように生きたい」、「キャリアを積みたい。臨床検査技師になって病院で働きたい。自分のおば

さんがモデル」とのことだった。また唯一人の1年生は「先輩の話を聞いてためになりました」と語った。ざっくばらんに将来のことなどをたずね、堅苦しくない話し合いの場と理解したようで、最後は表情も和らぎ、初日を終えた。

2. 第2日目

テーマ：月経とのつきあい方

月経についての基本的知識の講義のあと、ディスカッションの冒頭では、「これまでの保健の授業で、このような内容のことは聞いたけど、こんなに詳しくなくて、さらっとだった」という答えが返ってきた。また「からだの中のホルモンの働きってすごいなと思った。今まで考えたこともない」、「からだって不思議」などと話した。学校教育よりも一歩踏み込んだ内容で月経を教育することで、女性である自分のからだへの興味関心を持たせることにつながると考えられた。

月経周期については、全員が「気にしたことがない」、「順調かどうかということ考えたこともない」、「最近いつ(月経に)なったか覚えていない」とのことだった。月経について、「周期がある」ということの意識も乏しいようであった。女性が自分のからだのことを知るための一番大切な事象であると考えられる月経について、もっと女子に意識させる教育の必要性を感じた。また全員が基礎体温という言葉を知っていたが、測ったことも、測ってみようと思ったことも一度もないと答えた。現状として、この5名は月経に関して困難な自覚がないようだが、周期を記録するなどの行動は伴っていない。女性の健康のバロメーターである月経について、高校生らにもう少し関心を高めるための介入が必要であることを実感した。月経周期により、からだや感情、食欲などにも変化が起こることを話したが、「いつも食欲あるし、甘いものがほしいし、汗はかきやすいし…」など微妙な体の変化は感じ取っていない様子であった。高校1年生と2年生ということもあり、受験などのストレスが強くなる前の今の時期に意識させておくことが必要ではないかと考えられた。

女性にとって「冷え」は体調不良のもととなりやすいことから⁶⁾、特に日常生活の見直しとして「冷え」を予防することを強調したところ、5名中2名が冷え性であると自覚し、冷房が辛いと答

えた。また自覚していない者の中に、猛暑日であったこの日、薄手ながら長袖のセーターを着衣している者がいたことから、「冷え」や低体温に対する対処についてのアドバイスは現代の子どもたちには欠かせないのではないかと思われた。

3. 第3日目

テーマ：生命の誕生

講義では、母性看護学での基礎的な内容を写真や画像を用いて教示した。高校生らは「こういう話、ちゃんと聞いたことがない。」「赤ちゃんがお母さんのおなかの中で羊水に囲まれて、それを飲んで過ごしているって不思議だな〜。」などと改めて感じ入っていた。学校教育の中での生命誕生の内容よりもさらに深いレベルであったこと、胎児がどのように母胎内で過ごしているかを知ること、よりリアルに生命を感じ取れたのではないかと考えられる。

実際に自分が生まれたときのことを親から聞いたことがあるか否かについては、5名中2名が聞いたことがあると答え、そのエピソードを語った。それらは「妹が生まれたときのこと、朝起きたら、お母さんがいなくて、お父さんもいなくて、おばあちゃんがいて…、お母さんが死んじゃったかと思ってずっと泣いていたのは覚えている」、「病院に行ったらまだまだですよ、と言われたのに、あっという間にお産が進んで、家族が誰も居ないときにお産になった、とにかく痛かったとお母さんが言っていた」などであった。今回、自分の誕生について考える機会となったので、是非、今夜にでも家族から自分の誕生について教えてもらうようにと言い添えて、この日を終えた。

4. 第4日目

テーマ：リプロダクティブ・ヘルス／ライツ

この日の講義内容は、性感染症、家族計画・避妊、不妊と高度生殖医療で、高校生にとっては少々難しい内容だったのか、それまでより反応が乏しいように感じられた。講義の感想を聞くと「性感染症とか、ピンと来ない」、「他人事じゃないけど、そんなに考えたことのない内容だった」という答えだった。また不妊と高度生殖医療では、野田聖子氏⁷⁾の実話である、第3者の生殖機能を使用して子どもを授かったという例を出し、

リプロダクティブ・ライツの行使についてどのように思うかをたずねた。「その人の自由だし、その人がしたいようにすればいい」、「法や規制の範囲内でやっていいと思う。もう少し世間が寛容になるといい」、「産んでくれる人がいるって言うなら、契約しているんだったらいいと思う」、「親はいいかもしれないけど、子どもの気持ちになったら、代理出産はいやかなって思う。受け入れられるかどうかかわからない」、「子どもの立場だったら、(代理出産の)事実を知りたいけど、知りたくない。複雑。でも知らされたとき、なぜ今まで知らせてくれなかったかって言っちゃう」、「口では簡単に言えるけど、実際はどうか。子どもの立場だったら嫌だ」などの答えがあった。まだ実際に「子どもをもつ」という立場からではなく、むしろ生まれた子どもの立場から高度生殖医療について考えるほうが、高校生らにとっては現実的なようであったが、いずれにしても、この日の内容は、受講対象の高校生らの興味の低いものであった。

5. 第5日目

テーマ：女性のライフコース

最終日はまとめとして、講座を受講しての感想を聴取し、また自らのライフコースについて再考する内容であったが、高校生らが看護学部へ興味を持っていたことと、生命誕生に関するメカニズムについての反応が良かったことなどから、内容を追加し、妊娠期、産褥期の体験を盛り込むことにした。妊婦触診モデル、産褥触診モデルを使用し、それぞれの時期の胎児と母体の変化を再度説明し、腹部の触診を実施させた。高校生らは妊娠中に増大したモデルの子宮を実際に触って驚き、腹部の中に胎児がいることを確認してまた驚き、産後の子宮があっという間に小さくなっていることにさらに驚いた。妊婦体験ジャケットも装着し、体重が10 kg増加した妊婦がどんなに体動しにくいかを体感し、身長的高低によってもずいぶん違うなどと感想をもらした。また、新生児モデルを5体準備して、各自1体ずつの抱っこ体験を行ったところ、みな非常に喜び、「かわいい。赤ちゃんがほしい！」など満面の笑みを浮かべながら、感情を露にしていた。中には、ずっと児を抱いていて離さず、そろそろ席に着くように、と促

さないと離れようとしないうちもいた。

これらの体験後の感想として、「妊婦体験は本当に重くて動きにくかった」、「これからは電車で妊婦さんに会ったらすぐに席を譲ろうと思った」、「お母さんがこういう思いだったのかとわかった」、「赤ちゃんは本当にかわいい」など疑似体験により、妊娠、出産を身近に感じたように思われた。

5日間の講座を終えて、自分のライフコースを再考してもらったところ、はじめから子どもがほしいと言っていたうちの一人は「赤ちゃんがほしいとマジで思った。自分の子どもを産みたい」と答え、また結婚願望なしと言っていたうちの一人が「赤ちゃん一人ひとりがかわいい存在。子どもを産み育てようという気持ちになった。もともと子どもは好きじゃなかったけど、模型を見て試してみると実際にかわいい」と答えた。この生徒は、初日から若干表情が硬かったのだが、最終日には非常に柔らかな笑みを浮かべるようになった。もう一人の結婚願望なしと答えていた生徒は、「(子どもは)いいな〜って思った。だけど(出産するのは)怖い…。将来はまだわからないが、目指している職業(養護教諭)があるので、今はそれに向かっている」と語った。

講座の感想として、「(これまでの高校の)授業ではよくわからないことがわかった」、「保健の授業の内容がよりリアルになった」、「大人になるためのことを知ることができた」、「大学でしかできない、こういう体験ができてよかった」などと答えた。

Ⅳ 講座実施後の評価と今後の課題

本講座は今年度初めて実施したのだが、研究としての介入というには準備に乏しく、評価指標も明確でない。評価材料としては、ディスカッションの要約筆記と進行役であった筆者らの所感だけであるため、主観的な評価でしかないことを限界と認めつつ、まとめておきたい。

まず内容についてだが、本講座は、性や生殖に関する知識の教授も行いはするが、いわゆる一般的な性教育ということではなく、女子高校生が自らの性を受け止め、将来的なライフコースを描き、次世代を育成する存在であるかもしれないという意識を持たせ、リプロダクティブ・ヘルスを

保持増進させることを意図し、開講したものである。若者らが自らの将来を考えるきっかけを与えることは社会への参画を実感できるという意義があり、成人への移行期にある世代に対する少子化対策の一步となり得る⁸⁾。したがって、このような講座の開講は少なからず、次世代育成への支援として効果があるものと考えられる。しかしながら、本講座の中でのリプロダクティブ・ヘルス／ライツの内容には高度生殖医療のような高校生には難解なものもあった。卵子は老化し、高齢になれば妊娠率が低下するという事実は若い時分に知るべきことではあるとしても⁹⁾、具体的な教育は青年期・成人期以降が適当と考えるべきであろう。

今回の講座では最終日に急遽内容を追加して、妊婦、褥婦、新生児のモデルを使用した体験授業を取り入れた。このような体験により、高校生らは母親の疑似体験をし、産む性としての自己価値観を高め、よりライフコースを意識できたのではないかと考えられる¹⁰⁾。実際に、講座前には結婚願望がなく、子どもが苦手と思っていた生徒が、新生児モデルなどに触れ、リアルな体験をした後に、子どもを産み育てることへの肯定的発言が見られたことは筆者らにとっても驚きであった。今後も講義だけに留まらない体験型の教育方法を工夫することで、より一層の効果が期待される。

講座準備の当初は、参加者数は数十人を予定していたが、5名の希望者にとどまった。ディスカッションを組み込むことを計画していたので、いくつかのグループ形成を考えていた。しかし結果的に5名で1グループ形成だったことは、進行役の目が行き届き、また教員と受講者との親密性を増すことができ、むしろよかった。毎回のディスカッションにより、自分なりの考えを持ち、解釈を行うこと、他者と意見交換を行うことでその違いに気づき新しい視点を持つことを期待したが、これについては、その域まで達することができなかったと考えている。高校生らにとって、まだ将来のライフコース自体が鮮明なものでなく、これを語り合うにはもう少し時間を要するようになる。しかし、他者の意見を聞くことが自身の将来を考える刺激にはなったのではないかと考える。少なくとも、先輩の話を聞いた下級生からはそのような発言があったことから、学年を超えた

参加者で構成されたことも功を奏した。

若者にとって、自分自身や将来について「考えるきっかけ」を与えること自体が成人期への移行を意識した家族形成意欲につながる可能性がある¹¹⁾。その意味では今回の介入は、女子高校生らに自分たちのリプロダクティブ・ヘルスを意識させ、将来について何かしらを「考えるきっかけ」になったであろうと思われる。

V おわりに

今回、本講座に参加した高校生らは、「女性と健康」という講座内容よりも大学教員による講座ということに興味を抱き、応募されたようであった。そうであっても、彼女らのライフコースを描くという作業に少々加担できたのではないかと考え、また大学と高校がこのような形で結びつけることは、高校側には進路指導についての参考に、また大学教員としては、ありのままの高校生を知る、という点でも有意義な活動ではないかと考える。今後もより多くの参加者に、リプロダクティブ・ヘルスを意識した健康教育活動を展開したいと考えている。

謝辞

今回ご協力いただきました学校関係者ならびに生徒の皆様、承諾をいただきました保護者の皆様に感謝いたします。

引用文献

- 1) 高田恵子, 鈴木幸子, 大月恵理子, 他: 高校生に対する性感染症予防教育講座受講前後における性意識の変化, 埼玉県立大学紀要, 11, 41-47, 2010.
- 2) 前田ひとみ, 高村寿子, 渡邊至, 他: 高校生を対象とした大学生による思春期ピアカウンセリングの評価 (1), 南九州看護研究誌, 5(1), 11-18, 2007.
- 3) 安達久美子, 高田昌代, 西澤由季, 他: ピアエデュケーションを用いた性教育に対する高校生の受け止め方, 神戸市看護大学紀要, 10, 33-42, 2006.
- 4) 西尾範博: 効果的なケース・ディスカッションに関する一考察, 流通科学大学教育高度化推進センター紀要, (2), 29-47, 2005.
- 5) 松本奈緒: 保健体育科教育学概論 E における授業の工夫, 秋田大学教育文化学部研究紀要教育科学部門, 67, 1-8, 2012.
- 6) 川嶋朗: 「冷え」対策は重要な一次予防, 日本予防医学会雑誌, 7(1), 3-10, 2012.
- 7) 野田聖子: 生まれた命にありがとう, 新潮社, 東京, 2011.
- 8) 齋藤幸子, 宮原忍, 内山絢子, 他: 少子社会における養育力の背景とその育成に関する研究 (3) — 高校生の意識と行動に関する調査, 日本子ども家庭総合研究所紀要, 第 45 集, 143-169, 2009.
- 9) 天川恵美子: 産みたいのに産めない 卵子老化の衝撃, NHK 取材班編著, 文藝春秋, 東京, 38-70, 2013.
- 10) 下中壽美, 井上松代, 玉城清子, 他: 「妊婦ふれあい体験学習」が高校生 1 年生女子のライフプラン, 妊娠・出産・育児の認識度に及ぼす影響, 思春期学, 27(2), 194-203, 2009.
- 11) 齋藤幸子, 宮原忍, 内山絢子, 他: 少子社会における成人期への移行に関する母子保健学的研究 (2) 高校生の意識と行動に関する調査, 日本子ども家庭総合研究所紀要, 第 47 集, 131-169, 2011.